

ほとけの混和会だより

平成二十七年五月

東光院
仏の混和会

第111号

釈尊の誕生会 はなまつり



四月十二日(日曜)釈尊の誕生会花祭りを執り行いました。みんな幸せに成りますようにと、六つのお祈りを致しました。

- 一、共に人々を信じ、共に信じ合える環境と成りますように。
- 二、他に己の優しさを施し、他の幸を喜びとする大きな心が得られますように。
- 三、様々な命を大切にすること。心が得られますように。
- 四、しずかに、おちついて物事を考え、とらわれの無い、広い広い心が得られますように。
- 五、自分の幸せだけを望まず、みんなの幸せの為に生きる使命感が得られますように。
- 六、規律ある生活を喜びとし、健全な心が育まれますように。

以上の如く、みんなでお祈りをして、梶田さんの伴奏の元に仏教聖歌を歌い、溝井さんとそのお友達、二人で釈尊の生涯を綴った紙芝居を読んで頂きました。

そのほかにも、沢山の人の心より御礼申し上げます。



釈尊の説かれた 法華経

お釈迦様がお亡くなりになられて、約二百年の後、釈尊の御教えの伝承者達によって、法華経が記されました。

その第二十章に、常不軽菩薩品と云う章があります。

これは常不軽菩薩と云う修行僧の生き方が記されているのですが、なんとこの常不軽菩薩は、お釈迦様の前世の姿なのです。

常不軽菩薩様は、ちよつとうといところがあったのか、お経を唱えることも、教えを説くこともされず、ただひたすらに、出家人も世俗の人もみんなごとごとく礼拝して、「貴方は何れ真理を会得して、ブツダと成り、そして人々の大きな信頼の元に真の幸を得られる事でしょう。私は深くあなたを敬います。決して軽んじることは致しません。」と、人々を敬い礼拝されたのです。

すると人々は「おまえのような無智な修行僧に礼拝されても嬉しくも何ともない、立ち去れ」と非難、罵倒して、石を投げつけるのですが、更に遠方から貴方を敬いますと礼拝されたのでした。

今の日本人は、憎しみには憎しみを返すという人が多いのですが、常不軽菩薩は憎しみに対して、愛を、尊敬を、信ずることを返したのです。又だまされていると知っていても、人をだましながらかるる境涯に於かれてる事を嘆



ネーネーお坊さん
それで、僕はどのよう
に受け止めたら良いの？



そうじゃな一作家の吉川英治さんが、「合う人、出会うものすべて我が師なり」と言ったように君の嫌いな人や様々な出会いを肯定的に受け止めて全てに感謝の念を抱くと言ふことなんじゃよ。難しいことだけど、努めてごらん、きっと大きな幸が得られるよ。

日本の仏様



今回より、この欄を担当することになりました長男の亮澄です。

昨今、仏像を訪ね御朱印を頂きにお寺巡りをする方が増えていると言われています。そこでお寺巡りをする際、そのお寺に祀られています仏像について、もっと知っていただけたらと思います。この欄では日本仏教にはどのような仏像がいるのか毎号少しずつですが紹介していきたいと思

日本には、様々な仏像が存在し、お寺には多くの仏像が祀られています。これらの仏像を大きく分類すると「如来」「菩薩」「明王」「天」の四つの部類に分ける事ができます。

「如来」とは、昔のインドの言葉であるサンスクリット語で「タターガタ」といいます。「如」には真実という意味があり、「如来」で真理の世界から来た者、悟りの境地に達した者という意味を持ちます。仏像の誕生は、仏教の開祖であるお釈迦様を具現化した事から始まり、仏教の発展と共に多くの如来が生まれていきました。

「菩薩」とは、サンスクリット語で「ボーダイサットヴァ」と言い、それを音写した言葉で、悟りを求める者という意味を持ちます。また、菩薩は悟りを開く前の修行の段階にあり、悟

りの一歩手前になるとされるため如来より近い立場で人々を救い導くと考えられ、多くの人に親しまれています。

「明王」とは、サンスクリット語で「ヴィドゥヤー」と言い、学問や智慧という意味を持ちます。真の智慧である真言を指す密教の教えから生まれた仏です。明王は人間の世界と仏の世界の狭間にある天界の炎の世界に住み、教えを持って導きながら、人々の煩惱や欲望を聖なる炎で焼き尽くすと言われています。

そのため、祈願を行う護摩法要の本尊は明王を祀られています。

「天」とは、サンスクリット語で「デーヴァ」と言い、神様を意味します。主にインドや中国にて信仰されていた他宗教の神様が、仏教の教えに取り入れられ、仏法を護る役割を担っています。例えば、七福神として有名な弁才天も元はヒンドゥー教の女神でしたが、仏教に取り入れられ弁財天と名を変え仏教の守護神として祀られています。

この様に仏像と言っても性質が異なっており、必要としている人に適切な救いの手を差し伸べられるよう、多くの仏像が存在しています。

注釈：サンスクリット語とはお釈迦様が生きていた時代より使われていた古代インドの言葉であり、仏教やヒンドゥー教などの經典にも使われている言語です。

おひめまつり

こんにちは。今号より紙面の一部を担当させていただきますことになりました次男の亮敬です。混和会だよりでは、近況報告などを中心に書き進めていこうかと考えております。

天台雅楽会に参加させていただきました

先日、調布深大寺において、天台雅楽会の関係者と知り合うことができました。

雅楽にはかねてから関心があった為、今回このご縁を元に雅楽会へ参加させていただく運びとなりました。

雅楽というと神社のイメージが強いですが、実は寺院に於いても法要の際に用いられることがあります。雅楽は中国や朝鮮を経て日本に伝わり、平安時代に隆盛をみました。が、天台宗をはじめとした日本仏教が大成したのもこの頃あたりです。



雅楽は三つの木管楽器が中心となって構成されており、私の担当は葦のリードを湿らせ振動させて音を出す筆箏(ひちりき)という管です。ほかには横笛の龍笛(りゅうてき)、パイプオルガンのような音色の笙(しょう)があります。どの管も個性的であって甲乙つけがたいのですが、いずれにしても、平安より続くその独特な音色はどこか趣が感じられ、厳かで伝統のある法要行事においては、良い雰囲気を出して、私たちを感動させてくれます。

私は、まだ始めたばかりの素人ですが、何か新しいことを始めるには良い季節です。ので、今後は法要の支えとなれるよう、練習に精進したいと思っております。合掌

